

第13回 日本在宅医学会大会 抄録集

『生きる』を支える在宅医療

平成23年3月12日(土)・13日(日)

会場

千里ライフサイエンスセンター

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2



シンポジウム1 在宅療法を「楽しむ」コツ

座長：長尾 和宏

医療法人裕和会 長尾クリニック

略 歴

1984年 東京医科大学卒、大阪大学第二内科
入局
1991年 市立芦屋病院内科医長
1995年 尼崎市にて長尾クリニック開院
現在、複数医師で年中無休の外来
診療と在宅医療を行う
ミックス型診療所を運営。
著書 「町医者力1～5」、「町医者冥利」
「パンドラの箱を開けよう」など。

在宅療養というと、「介護が大変そう」、「暗い」、「死ぬ話ばかり」と感じておられる病院関係者や市民の方が多いのではないのでしょうか。

しかし在宅療養とは、言うまでもなく「生きて楽しむ」ためのものです。

本シンポジウムでは、藤田大会長から与えられた「楽しむ」というテーマで思い切り「楽しみたい！」と思います。

食べる楽しみ、仮装とハグする楽しみ、介護する楽しみ、そして緩和医療で切り開く楽しみなど、達人たちのエッセンスを満喫し、明日からの在宅療養に活かせることを願います。

シンポジウム1 在宅療法を「楽しむ」コツ 楽しむための嚥下リハ～食医のすすめ

小谷 泰子

医療法人美和会 平成歯科クリニック

— 略 歴 —

《学歴》

広島大学歯学部 卒業
大阪大学大学院 学位取得修了
大阪大学博士（歯学）

《職歴》

2004年4月～ 大阪大学歯学部附属病院
顎口腔機能治療部 医員
2009年5月～ 医療法人美和会
平成歯科クリニック 開院
大阪大学歯学部附属病院
臨床講師

《研究・臨床歴》

摂食・嚥下機能、音声言語機能をはじめとする口腔機能のリハビリテーションに関する臨床・研究を行っている。2009年5月に日本初となる、嚥下障害、睡眠時無呼吸、ドライマウスに特化した歯科医院を開院。

URL : <http://www.hdc-yoikoku.com/>

「食べる」ことは楽しい。美味しい物を味わう、好物を嗜む、旬の食材を食べて季節を感じる、お正月・誕生日・クリスマスなど記念日にふさわしい物を食べて祝うなど、「食べる」ということは、生活を楽しむ上で不可欠なものである。

我々は、疾患や加齢のために嚥下機能が低下し、「食」に関わる楽しみを障害された方々に対し、摂食・嚥下リハビリテーション（以下、嚥下リハ）を行う。「嚥下リハ＝嚥下訓練・頑張っ

取できるようになったというケースもある。しかしながら、そのようなケースは背景疾患や年齢などの条件が整っている場合であり、嚥下障害が完全に治る在宅症例は少ないのが現状である。「治療」を行う病院と同じように機能回復を目指し、頑張らないといけない嚥下訓練を、「生活」の場である在宅で適応すると、本人のみならず介助者や医療者も消耗し無力感を味わうことになる。

リハ医学の治療の対象は、機能障害だけではなく、心理的障害にも及ぶものである。在宅で嚥下機能の回復を図ることができなかつたとしても、「食」に関わる楽しみ全てを奪われてはいけない。在宅では、「食」に関わる楽しみを味わってもらうことが嚥下リハの目的であり、嚥下リハ自体が楽しくなくてはならない。安全のために大好きな食べ物を禁止するのではなく、食べる喜びを目指して好みのものをどう工夫して食べていただくかを考える、もしくは、誤嚥をしてでも食べたいものがあるのであれば、いかに誤嚥性肺炎にならないように対応するかを考えることが必要である。今ある嚥下機能を最大限に活かしつつ、食べる楽しみを味わっていただくように介助・支援することが在宅の嚥下リハである。

「食」の楽しみを味わう嚥下リハのためには、嚥下機能、全身状態、嗜好、希望などを把握する必要があり、医療者・介護者・家族の連携は必須である。古代中国では医師を、「食医」「疾医」「瘍医」「獣医」4つに分けたとされている。「食医」は「食事治療専門医」で、最高位の医師であった。現在では、「食医」＝「食に関わる医療従事者」と定義し、食べる楽しみを真剣に考える医療者・介護者・家族にふさわしい名称かと考えている。今回の話を通じて、楽しむ嚥下リハを身近に感じていただければと考える。

シンポジウム1 在宅療法を「楽しむ」コツ 楽しむための「か・い・ご」

丸尾 多重子

つどい場さくらちゃん

略 歴

“まるちゃん”って何者？

名前：まるちゃん こと

丸尾 多重子（まるお たえこ）

所属：特定非営利活動法人 つどい場さくらちゃん（兵庫県西宮市）代表

☆ 10代の頃より、脳軟化症で自宅で這い廻る

祖母（父の母）を介護する母をサポート

☆ 高校卒業～4年間商社勤務

☆ 調理師の資格取得

☆ 10年以上の在宅介護の末 86歳の祖母が自宅で亡くなる

☆ 東京にて15年間「食」関係のあらゆる仕事に従事

☆ 帰阪した翌年から家族の介護がはじまり、「阪神淡路大震災」をはさみ10年間で母（肺がん術後転移）・兄（長年の躁鬱→自死）・父（脳梗塞認知症→誤嚥性肺炎）を在宅で看取る

☆ 父の看取りの後、半年後に「1級ヘルパー講座」へ通い（2級ヘルパーは介護中に）実習先の施設の入浴介助にキレ、翌日から不動産屋を廻り、20軒目でみつけたマンションを借り2003年12月から準備をし、

☆ 2004年3月つどい場【さくらちゃん】をスタート 個人の借金限界にきて

☆ 2007年4月にNPO法人となる

☆ 2008年11月に一軒家の借家に引っ越し

☆ 多くのボランティアさん達に支えられながら潰れずに存在し（介護保険事業を一切せず）8年目を迎えた

これまでも、これからも、

<星になった家族たちへの、詫び状>です。

“伝えたいこと”

「つどい場さくらちゃん」って何？という質問をよく受ける。

いつも「つどい場」と答える。

一人では生きてゆけないのが“ひと”一特に障害をかかえて生きる人（認知症も脳の障害）には、身近な家族・仕事で関わる人・地域の人たちのサポートが不可欠。

そこで、本人・介護者・介護職・医療者・行政・社協・議員・大学福祉関係者・学生・地域活動者・子供たち・子育て中のママ・・・誰でもが集える<場>

しゃべれる場・泣ける場・笑える場・食べる場・学べる場・共に出かける場・生きる場
それが<つどい場>。

これからの、超高齢化社会・少子化の時代に、縦割でなく、いろんな人たちが“まじくる”「つどい場」が地域のあちこちに出来ればいいなあとの“想い”をこめての話をさせていただける“場”をいただけてしあわせです。

NPO法人 つどい場さくらちゃん
代表 まるちゃん(丸尾 多重子)

シンポジウム1 在宅療法を「楽しむ」コツ 楽しむための「疼痛緩和」

服部 政治

癌研有明病院麻酔科

略 歴

財団法人 癌研究会有明病院
麻酔科（ペインクリニック）医長
がん治療支援緩和ケアチームリーダー
昭和42年1月 神奈川県生まれ（44歳）
1985年（昭和60年）3月東京都立日比谷
高校卒業後、1986年大分医科大学へ入学。
1992年（平成4年）同大学を卒業し、同麻
酔学教室へ入局。その後関連病院で麻酔科
としての修行をし、1999年米国留学した。
留学中にメモリアル・スローン・ケタリング・
キャンサーセンターで麻酔科ペインクリ
ニック科による術後鎮痛ならびにがん性疼
痛管理を半年間学び、2000年に帰国し、大
分大学医学部附属病院の緩和ケア支援チ
ームリーダーの任に就く。2006年10月、国
立がんセンター中央病院麻酔・緩和ケア科
緩和ケアチームリーダー、2008年3月、が
ん性疼痛患者の中でも治療困難な激しい痛
みに対する専門的な治療（Interventional
pain treatment: 神経破壊、脊髄鎮痛法など）
を中心としたがん性疼痛管理に取り組むた
め癌研有明病院麻酔科（ペインクリニック）
へ移籍し、現職。
<認定>
日本麻酔科学会 専門医
日本ペインクリニック学会 専門医
<ボランティア活動>
2003年12月18日～29日： 口唇口蓋裂
協会ベトナム医療支援（麻酔科として）
<非常勤>
東京女子医科大学ペインクリニック非常勤
講師、香川大学看護学部非常勤講師、
富山大学医学部麻酔学教室非常勤講師
<学会活動等>
日本麻酔科学会、日本臨床麻酔学会、日
本ペインクリニック学会、日本疼痛学
会、日本慢性疼痛学会、日本エピドラ
スコピー研究会、日本緩和医療薬学会、
American Society of Anesthesiologists、
International Association for the Study of
Pain、International Anesthesia Research
Society 他
<研究活動>
厚労科研”がん性疼痛に対する橋渡し研究
連携拠点の構築”研究チーム 山田班 班員
<業績>
論文・著書（2010年1月現在）：
麻酔・集中治療関連 原著 14
ペインクリニック関連 原著 45
著書（分担執筆含む）88 雑文 56

がんの痛みはさまざまである。がんの進行ととも
に増強する身体の痛み、痛みに伴って起こる食
欲低下、食欲低下に伴って起こる全身衰弱、全身
衰弱に伴って起こる死への不安、不安によって増
強する身体の痛み。この悪循環に陥ったときに取
られる処置は・・・大量のオピオイド投与、無為
に処方される鎮痛補助薬、鎮静剤の投与などであ
る。はじめて経験する患者さん、そして家族は苦
しみから解放されるならと鎮静状態にあることを
受け入れる。これでなにを楽しむことができるで
しょうか？この不幸な悪循環の基盤に身体の痛み
が入っていることが多いのである。

生きることの基本である「食」、人が生きるた
めに必要な「触れ合い」「笑い」、不幸にも手助け
が必要となったときの周りの「介護」、これらを得
て人生を楽しむためには、上述の悪循環を断つ
ていかななくてはならない。

多くの新医療用麻薬の開発、発売によって多くの
がん患者さんが痛みから解放されていることに
疑いの余地はない。ただし、医療用麻薬や鎮痛補
助薬で痛みがコントロールできないと、ときに無
考慮に増量だけされて鎮静状態になることも少な
くない。本来の緩和医療は心臓さえ動いていれば
いいのではなく、苦痛なく生きて「楽しむ」こと
が最終目標である。

疼痛を放置すれば、人生は楽しめない。

疼痛を軽減するための大量の鎮痛薬・鎮痛補助
薬で眠くなつては、人生は楽しめない。

疼痛を感じなくさせるために寝かしては、人生
は楽しめない。

しかし、痛みを取るだけでは、これまた、人生
は楽しめない。

あらゆる医療手段を使ってぎりぎりまで痛みを
取り除き、食を楽しみ、人とふれあい、笑い、人
に助けをもらいながら、本当の「楽しみ」を得て
ほしいと思う。

本シンポジウムの4番目として、このような
悪循環を断つために癌研有明病院の緩和ケアチ
ームが取り組んでいる専門的がん疼痛治療法を簡単
に紹介し、実際に「痛み」を緩和したことで「人
生の楽しみ」を得られた症例を紹介したいと考
えている。

シンポジウム 1 在宅療法を「楽しむ」コツ 楽しむための「ハグとユーモア」

岡原 仁志

おげんきクリニック

略 歴

生年月日：昭和35年6月9日生 50歳
(4人兄弟の2番目)
学歴：小松保育園(大島)→明新小学校(大島)
→修道中学・高校(広島)→順天堂大
医学部(サッカー部卒)
医師経歴：
S61.04～H11.06 消化器・一般外科入局
(順天堂大学)
H07.07 伊豆にて在宅医療を開始
H04.03：医学博士号取得
H11.07～H11.08 ホスピス見学
(聖隷三方ヶ原病院)
地域医療研修
(長野佐久総合病院)
H11.08～H11.12 呼吸器科研修
(静岡富士病院)
H12.01～H15.06 整形外科入局
(順天堂静岡病院)
(週1日 小児科、皮
膚科、ペインクリニッ
ク研修)
H15.07～H16.03 大島(山口県)に帰島、
岡原医院 副院長
H16.04～現在 おげんきクリニック
開設 院長就任
専門：消化器科・外科・整形外科・在宅医療
研修科：呼吸器科・皮膚科・小児科・ペイン
クリニック
趣味：サッカー(サッカー日本代表の熱烈
サポーター、大島は日本代表の岩政
大樹選手出身の島です)
好きな言葉：思いやり 笑顔 ハグ ユーモア
「夢」：思いやりの医療を創り、日本中に広げ
ること

平成16年4月に山口県の瀬戸内海の島・大島で、満足してもらえる「思いやりの医療」を届けるため、おげんきクリニックを開設。『ハグ』と『ユーモア』を添えた「思いやりの医療」をスタッフみんなで創りながら、心を込めて実践している。我々は『ハグ』を「抱きしめる」・「寄り添う」・「聴く」・「心の居場所を作る」・「地域で支える」と考え、『ユーモア』を人間の存在価値と考え、医療に取り入れている。医療を通じて、患者さんやご家族に人生の「重なり」を感じてもらいたいと考えている。

クリニックでは「その人らしい最期(完成期)を輝きながら迎えてもらう」という目標を掲げ、

「ハグとユーモアを添えた在宅緩和医療」に取り組んでいる。これらの取り組みを聴いて頂き、医療の原点を一緒に考え、皆様の今後の医療活動のお役に立てれば幸いです。

【方法】

『ハグ』と『ユーモア』を添えて、平成16年9月より21人の方の自宅での最期を家族と一緒にお手伝いした。その中のお二人の事例を中心に聴いて頂く。

【結果】

Eさん、40代・女性(看護師)。職場健診にて、肺がん・脳転移の診断。治療が奏効せず、自宅での最期を希望。家族と一緒に仮装などの『ユーモア』と『ハグ』を添え、ボランティアの力も借りて診療を行った。娘さんがお母さんに詩を書き、ボランティアが歌にしてくれた。みんなで歌を届けた。Eさんはとても喜んで、その歌を聴聞きながら最期を迎えた。家族と一緒に自宅で看取った。死後の処置をして、みんなで記念写真を撮った。そして、Eさんを看取った母は、「楽しい介護だった」と言った。

Aさん、60歳代・男性(商社マン)。定年前の健診にて肝臓がんを指摘。奥さんと二人で大好きな大島での最期を希望され、退職し帰島した。12月におげんきクリニック初診。傾聴を大切にした『ハグ』と『ユーモア』を添えた医療を開始。Aさんは、奥さんとの馴れ初めや結婚のこと、最期に海外旅行に行きたいこと、自分が旅立った後独りになる妻がとても心配なこと等を笑顔を交えて語った。エンディングノートに葬儀やお墓のことなどを書いた。自分の最期や旅立った後のことも積極的に話され、心がとても楽になったと語った。家族に対する感謝の気持ちも聴けた。最期の思い出にと二人で韓国旅行に出かけた。3月に広島のがんサロンの方々がおげんきクリニックを訪問。Aさんと奥さんも参加。他のがん患者さんたちと楽しそうに交流された。素敵な笑顔だった。

1週間後の3月下旬、腹痛出現。その後容態は急変。同日の夜、家族に看取られながら永眠。エンディングノートには家族一人一人に感謝の言葉が書いてあった。「棺には和装で、結婚指輪を入れてくれ。葬儀は家族だけで、お骨は大好きな海に撒いてくれ」と書いてあった。娘さんがお父さんに詩を書き、ボランティアに頼んだ歌が出来たのは旅立たれた翌朝だった。お通夜にこの歌をみんなで聴いた。Aさんの生前のエピソードを家族は涙と笑顔を交えながら語ってくれた。

尚、今回の発表で使用される個人情報、故人のご家族に了解等を得て、使用させて頂きました。